
巡る

おろろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
巡る

【コード】
N0633K

【作者名】
おろろー

【あらすじ】
繰り返し事で起き得る出来事。

信じられないほど、穏やかな一生だった。

生まれた家が商家だったから、傭兵になる必要もなく、逆に傭兵を雇う側になって安全な一生を過ごせた。

辛い事も沢山あった、しかし、幸せな事の方が沢山あった。

今回の私は、幸せだ。

「おじいちゃん!!」

扉を蹴破ってパタパタと駆けてくる孫を見つめて、幸せを噛み締めめる。

“ん？ どうしたんだ”

「またお話を聞かせてっ」

“もちろんいいよ、さて何がいいかな”

私は椅子に腰掛け、孫を抱き上げて膝に乗せる。

ついでに孫と一緒に入ってきた使用人に、紅茶の用意を命じる。

体全体に伝わる孫の暖かさが、私に一層の幸せを齎してくれる。

「ドラゴン退治が良い!!」

“それは先週話さなかったかな?”

「また聞きたいのっ」

“はは、いいよ。じゃあ、ドラゴン退治の話にしようか”

「やった!!」

女の子なのに英雄譚を好む孫に、少しだけ将来が不安になるが、それでもこの子が望むのなら話す事に戸惑いは無い。

“遠い遠い、ずっと昔の話でね。小さな村になんの力も持たない少年が居た”

「魔法も使えないんだよね?」

“そうだね。よく覚えていたね、エライよ”

「おじいちゃんのお話は全部覚えてるものっ!!」

私は口元を笑みの形に崩し、孫の頭を撫でる。

こちらでは珍しい黒の髪がサラサラと流れ、私は望郷の念と共に撫で付ける。

はにかむような笑みで私を見上げる紅い目を見つめ、私も笑いかける。

ワタワタと目を逸らし、俯く仕草も愛おしく、笑みを深める。ちょうど使用人が紅茶を持って帰ってきた。

“君もどうか？ ドラゴン退治の話だが”

使用人はテキパキと紅茶を入れつつ、拒否の言葉を返してくる。彼にも彼の仕事があるか、私は誘いを断った彼に謝罪を送り、退室を促す。

「おじいちゃんは、どうして使用人にもあんなに丁寧なの？」

“おかしな事かな？”

「んー。だってパパもママも命令してるよ」

“育て方を間違っただかな”

「イケナイ事なの？」

“難しい所だけどね、私は使用人だからと礼を欠いた物言いは良くないと思っているよ”

「どうして？」

“ベアトリスは乱暴な物言いをされてどう思うかな？”

「んー嫌だと思っわ」

“だろう？ そう言った物言いをされている側は、ベアトリスのよ
うに嫌な気持ちになる場合もあるんだよ”

「だから丁寧にお話するの？」

“そうだね。私は自分がされて嫌な事は他人にもしないよ”

孫は何か思う事があったのか、俯いて考え込んでいる。

私はその仕草に目を細め、孫の頭に手を乗せる。

“私がそうしているからベアトリスもそうしなければ成らない。な
んて事は無いんだよ、これから沢山の人を見て、沢山の経験をして、
人にどう接すれば良いのか、自分で考えなさい”

「…うん」

孫は、どこかシヨンボリしている。

理由は見当たらないが、いろいろ考えているのだろうと思い、私
は紅茶のカップに手を伸ばす。

それを察したのか、孫は慌てた様子で私のカップを掴み、私に差
し出してくる。

“ありがとう”

「うん。私が乗ってるから取りにくいでしょう」

“そんな事はないけどね、嬉しいよ”

私は笑みを深め、カップを口につける。
孫も私に習うように両手でカップを持ち上げ、紅茶を飲んでいる。

“あまり喉を鳴らしてはダメだよ”

「あ」

しまったと言う風に声をあげ、カップから口を離す。

“私の前ではいいけどね、社交界や公の場ではマナーも重要だから、
気をつけなさい”

「うん。今は、いいよね」

“構わないよ”

「やった」

コクコクと紅茶を飲みだすそれを見て、私は話だす。

“村で育った少年は傭兵になった、少年は強かった、傭兵仲間の中でも一番強くてね……”

息子が迎えに来るまで沢山の話をした。

ほぼ全てが英雄譚である事に、やはり孫の将来が不安になるが、それでも可愛いのだからしょうがない。

それから3年恙無く幸せに暮らし、私はその生涯を終えた。

次に悲鳴を上げたのは小さな村で、私はいつものように傭兵になった。

23の頃、私の所属する傭兵団はある町を攻める作戦に参加した。それは幸せな私の居た町で、すでに以前の私の一族は移動しているのを確認した。

確認していなければ、私はこの作戦には参加しなかつただろう。

町を侵攻する軍靴の音は、寒々しく。

私の大切な物を壊されていくようで、見ていられなかった。

所属する傭兵団の任務は、商家の制圧だったのは何の皮肉だろうか。と悔しくなったものだ。

その過程で一箇所だけ制圧出来ない区画が出来たのは、本当に何の悪ふざけかと思つた。

その場所は、私が老後を過ごした場所。私が生涯を閉じた場所だ。

った。

私達がそこに駆けつけると、屋敷の門の前に死体が積み上げられ、山かと思うような惨状が出来ていた。

そして、門の向こう側で剣を地に突立て、怪我の一つもしていない女性の姿。

黒い髪は腰まで伸ばされ、鷹のように鋭い紅の目は殺意を隠す事もない。

“……何故、だ”

戦乱に巻き込まれると解った時点で、脱出しているのを確認したはずなのに。

見間違っはすの無い姿がそこに在る。

“何故だ……ベアトリス”

彼女は苛烈な目で私達を睨み、一括する。

「ここから先は通さん」

ハスキーな女性の声。

弾けるような笑みも、私を呼ぶ可愛らしい声も無い。

「女一人で耐え切れるとでも思ってたのか」

先頭に立つ誰かが声をあげるが、私には聞こえない。
何故こんな事になってしまったのか、その思考だけが私を占領する。

「なんとわれようと、この先に通すつもりはない。1000の軍勢も1000の軍勢も、おじい様の安らかな眠りを妨げる者は、この私が殺す」

“……………”

視線が下がる。

いや、私の膝が折れたのだ。

誰がこんな事態を予測できようか。

団長の掛け声で、始まる殲滅戦を、私は呆然と眺める。

一人斬り、十人斬り、五十人斬り。

ベアトリスはそれでも折れない。

私が話した英雄譚そのままの英雄の姿。

ついには王国の弓兵部隊が到着し、ベアトリスはその膝を折った。

「…私の……陽だまりを、汚すなっ！！！！」

それでも、ベアトリスは立ち上がり、来る者を斬り続ける。

私は己の胸を剣で貫き、その生涯を終えた。

悲鳴は酷い物だっただろう。

私は狂いたい。狂いたくて狂いたくてしょうがない。

黒髪の女性を見る度に沸き起こる、愛おしさと狂おしさ。
何故、私は生きている。

(後書き)

悲劇なのか喜劇なのか。
それは読む人それぞれ。

今晚にでも連載の方をUPします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0633k/>

巡る

2010年10月8日14時58分発行